疑似家族的関係のなかで促される成功体験の検討：伝統技能伝承における育成者への半構造化インタビュー調査から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 弥生, Nishioka, Yayoi メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2694

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第51号　2022度

研究ノート

疑似家族的関係のなかで促される成功体験の検討

―伝統技能伝承における育成者への半構造化インタビュー調査から―

A Study on the Successful Experience Encouraged in Alternative Family Relationship
：Interviews with Supporters in Transmission of Traditional Skills

西　岡　弥　生
Nishioka Yayoi

1　はじめに

1-1　研究の背景

1989年（平成2年）の1.57ショックを機に少子化問題が顕在化し、エンゼルプランを皮切りに少子化対策が本格始動した。しかし、1997年（平成9年）には合計特殊出生率が人口置き換え水準2.08をはるかに下まわり、日本は子どもの数が高齢者人口よりも少ない「少子社会」[1]となった。一方で、児童相談所での児童虐待相談件数は、1.57ショックの1989年度に1,101件だった状況から2020年度は205,044件と、約30年で20倍以上に増加した[2]。子どもを産み育てやすい社会を目指し、2015年には子ども・子育て支援新制度が施行され、保護者の就業の有無に関わらず地域社会で子育て家庭を支える相談体制の整備が進んだ。しかし、子育てに支障をきたしても相談につながらず、支援の輪から外れ孤立する保護者も少なくない。養育機関・教育機関を利用する保護者支援においても、育児不安や子育ての負担感が高い保護者ほど相談が少なく、深刻な問題を抱える保護者ほど接近することが難しいといわれている（笠原2000；谷口2003；高畑2014；鶴ら2017）。地域社会で暮らすひとり親家庭においても、多くの生活問題を抱える母親ほど、負い目や自信のなさから相談することに対して不安をもち、「相談に行く気がしなかった」状況にある（清水2016）。

相談をためらう背景に、相談者自身の自己肯定感の問題があると考えられる。自分自身の存在を認め肯定する自尊感情や自己肯定感は、日常的な援助要請にも影響を及ぼす。これらの感覚が低い水準の状況が続くと、問題を解決し事態を改善することを諦め、支援を求めることを放棄するリスクを生む[3]。近年、ソーシャルサポートが保護者にもたらす影響として、援助要請との関連が着目されている（厨司・佐川2019）。ソーシャルサポートは保護者の援助要請を促し、虐待予防の観点からも期待されている（本田2017）。従って、保護者が子育てに困難を抱えた際にすみやかに相談につながり、援助要請を行う基盤を創るためには、保護者の自己肯定感を育む関わりを、ソーシャルサポートの観点から検討する必要がある。

母子生活支援施設では、母親の自己肯定感の回復に向けた生活支援並び子育て支援が提供されてい

る。具体的には、生活基盤を整えるための法的支援・社会的な制度利用の支援、母親の学びの保障による自立に向けた就労支援と、子育てに係る支援である。母親たちの多くは生活経験が乏しく養育技術に課題をもち、日々の生活につまずきを生じやすい状況にあるため、支援者は母親の生活文化を尊重しながら母親と共に子育てに関わり、子育て生活に必要な家事・養育・対人関係のスキルを体得できるよう働きかけている（厚生労働省 2011；中澤 2022）。さらに、DV 被害のある母親に対しては、心理的な支援と共に、支援者との間で深い人間関係を築き、母親が他者に受け入れられる経験を積み重ね、本来の自己評価を取り戻すよう生活のなかで支えている。生活困難を抱える母親が自己肯定感を回復させるには、子育てに必要な生活スキルを媒介に、支援者と関わり信頼関係を構築するなかで、小さな「成功体験」を積み重ねることが必要といえる[4]。

1-2　成功体験の積み重ねの支援を通じて自己肯定感を育てる取り組み

生活経験が乏しい若年層が「子育て」という未知の世界に参入し、周囲の助けを借りながら不安や躓きを克服し「親」として成長する過程は、伝統技能伝承の入門者が馴染のない生活環境に身を置き、小さな成功体験を重ねるなかで継承者として成長する過程に通底する（西岡 2022）。ここでは、「成功体験」と自己肯定感の関連について、教育、保育、看護といった支援現場だけでなく、伝統技能伝承の領域での取り組みもみていく。

1-2-1　子ども時代における成功体験と自己肯定感の関連

自己肯定感とは、ありのままの自分を受け入れ肯定する感覚として、自尊感情、自己有用観、自己有能観、自己効力感といったものから、実存的自己肯定感までを包含した広い概念で捉えられ（諸富 2011）、Well-being の基底にある。教育現場では、子どもたちの自己肯定感を育てる授業のあり方や、教師の関わり方の研究が進んでいる。宮川・浅沼（2015）は、児童中心主義教育の視点から 7 人の教師の語りを分析し、自己肯定感は自分を認めてくれる他者との関係性のなかで育ち、自己表現・言葉・成功体験によって高められると述べている。具体的には、課題とするテーマを媒介に、パフォーマンスができるようになる・発表する・人に何かを伝える等を試行錯誤でやりとげたことで、新たな自分を発見し自分を肯定的に認めることができる。ここで教師は、子どもの努力の過程や成果を認める他者として機能するため、子どもが主体的に学ぶ総合の時間での実践が有効である。菅沼・野田（2018）は、生活科での主体的な学びが、原体験や成功体験を充実させ自己肯定感を高めることができるとしている。保育の領域でも、乳幼児が周囲の大人に見守られる環境で、小さな成功体験を積み重ね褒められることで育まれた自己肯定感が、成人した時に困難を乗り越える土台になることが示されている（長瀬 2018）。いずれも、支援者である教師や保育者は、活動のテーマを媒介に子どもと関わるなかで、子どもが主体的に取り組み達成感を得て、他者に承認される「成功体験」に導く伴走者の役割を果たしている。

1-2-2　母親の子育てに係る成功体験と自己肯定感の関連

看護の領域では、0～4 か月児の母親の精神的問題の背景に養育能力の低さと育児不安があることをふまえ、母親が自分なりの育児技術を身に付ける成功体験が、母親としての自信となり、育児のストレ

スや困難を乗り越える力をもつことが示されている（高橋・齋藤 2018）。また、保育の領域では、地域社会における子育て支援の一環である一時保育の専門性として、子育てに達成感や肯定感を得にくい母親が、日常の暮らしのなかで子どもとの関わりにおける「小さな成功体験」が重ねられるように配慮することをあげている（榊原 2017）。具体的には、保育者は子育ての知識や技術を介し母親と関わりながら信頼関係を構築し、母親が生活のなかで実践していることを言葉にして認める等で、母親の自己肯定感を育てている。また、一時保育の場で子育ての仲間と十分につながりがもてるよう配慮することで、母親が他者との関係性を広げる成功体験を促し、地域社会で周囲の人と支え合えるようソーシャルサポートの可能性を拓いている。一方で、家族の自己肯定を基盤に家族が様々な場面において力を発揮する可能性を示す Family Confidence の概念では、家族が自信をもつための関連要因として、「家族の生活の質（社会参加 / 親戚関係 / ソーシャルサポート）」「家族の成功体験」「家族からのサポート」「自己効力感」があげられている（岩崎ら 2021）。また、Family Confidence に関連する Maternal Confidence の概念は、「母親が子どものニーズに応じる能力やスキルを獲得し、母親として自己に関する評価を肯定的に捉えられること」と定義されている（上原・中西 2017）。上記の先行研究から、子どもの養育に係る個人や家族の自己肯定感は、子育てに必要な知識・能力・スキル等を他者との信頼関係のなかで獲得し、他者から肯定的な評価を得ることで育ち、その過程には「成功体験」とソーシャルサポートが必要なことが示唆された。

1-2-3　伝統技能伝承における成功体験と自己肯定感の検討

一方、伝統技能伝承の領域では、次世代の継承者が地域社会の支援的な関係性のなかで日々の稽古に励み、技能の上達を周囲に承認されることで、自己肯定感を高め成長する過程が明らかにされている（西尾 2006）。具体的には、芸舞妓は「疑似家族関係」、能楽師は「師匠と弟子」といった支援関係を中核にし、技能指導者、同業の疑似家族、関連業者を周辺においた技能伝承システムが内在化された地域社会で育成され、鑑賞者を含む一般社会というマクロシステムで承認され経済的な自立を果たしている（西尾 2006；2017）。換言すると、継承者が厳しい稽古に耐え一人前に育つためのソーシャルサポートの輪が地域社会に幾重にもあり、そのなかで継承者は生活面も支えられ、日々の稽古での上達が承認され成功体験を積み重ねる仕組みのなかで育成される。西岡（2022）は、伝統技能伝承の場でフィールドワーク及び半構造化インタビュー調査を実施し、育成者の取組みをサーバント・リーダーシップ論の分析枠組みを援用し検討した。サーバント・リーダーシップの 10 の特性[5] を 3 つのカテゴリーに分類したうちの 1 つである「『成長支援』の取組み」には、「生活基盤を整えるため介入的に関わる」といった継承者の生活の安定を図る取り組みと、「日々の稽古を続ける努力が自信や収入につながり報われるシステムを創る」といった実直な努力が物心両面の成功体験につながる取り組みがある（西岡 2022）。伝統技能伝承の領域においては、継承者は主となる育成者以外にも疑似家族的な関係にある継承者仲間や関係者と支援的な関係をもち、ソーシャルサポートの輪が重なる環境において、生活基盤の調整を図るといった踏み込んだ支援を受けながら稽古に励むことが示された。日々の稽古や発表の場で上達が承認され収入につながる小さな「成功体験」を重ね、自己肯定感を高める状況が示唆された（西岡 2022）。

2　研究の目的

保護者が、子育てに困難を抱えた際にすみやかに相談につながり援助要請を行う基盤を創るためには、保護者自身の自己肯定感を育む関わりを、ソーシャルサポートの観点から検討する必要がある。特に生活経験の乏しい保護者については、子育てに必要な生活スキルを媒介に、支援者と関わり信頼関係を構築するなかで、小さな成功体験を積み重ねることが必要といえる。また、先行研究で示された、継承者の日々の努力が、物心両面の成功体験につながり自己肯定感が育つ「伝統技能伝承の取り組み」と同様に、少子社会における子育てという無償の営みが、地域社会で承認され報われる仕組みをつくることが求められる（西岡 2022）。以上をふまえ本研究は、伝統技能伝承の育成者と継承者が伝統技能を媒介に信頼関係を構築する疑似家族的な関係において、育成者のソーシャルサポートが継承者の「成功体験」を促し自己肯定感を高める関わり方を検討することで、子ども家庭福祉領域での保護者の自己肯定感を高める関わり方の示唆を得ることを目的とする。

なお、本研究で用いる用語は西岡（2022）を参照し、【伝統技能】は伝統的な芸道等の各領域で必要とされ前世代から受け継いだ基本的な技能とし、【踊り・芸・芸事】等の言葉で表現される具体的な技能と共に子育て生活スキル[6]に位置付ける。また、【稽古】【見番】【お座敷】は伝承と継承の「場」として位置付け、【置屋】は生活場面に位置付ける。さらに、【伝承者・育成者・経営者】等で表現される者は支援者に対応し、【継承者・入門者・初学者】等で表現される者は保護者または母親に対応させて論じる。

3　研究方法

3-1　調査対象と手続き

調査期間は 2019 年 10 月～2020 年 3 月である。本研究の目的に鑑み、フィールドワークと半構造化インタビューを実施した。フィールドワークにおいては、約 150 名（調査当時）の継承者が在籍する伝統技能伝承の場である X 伝統芸能組合の「稽古場（見番）」「置屋」で実施した。毎年 1 月に開催される新年の催しに向けた稽古期間中に、X 伝統芸能組合に所属する継承者が集い舞台稽古を行う「稽古場（見番）」並び、稽古以外での日常生活を共同で過ごす「置屋」で参与観察を行った。また、半構造化インタビューは、継承者の育成に関わり継承者を生活面からも支える育成者 7 名を対象に、約 60 分～90 分で実施した。インタビューガイドの①伝統技能伝承における日々の稽古で、技能の上達に伴い日常生活での自信や人格的な成長につながると感じることはあるか、②伝統技能の継承者を育てるために、地域社会でどのような支え合いがあればよいと思うか、③伝統技能の育成者として継承者を育てる際に、どのようなことを心がけているか、3 つの質問に沿って聞き取りを行った。

3-2　分析の方法

3-2-1　分析の枠組み

厚生労働省はソーシャルサポートについて、健康行動の維持やストレッサーの影響を緩和する働きがあるとし、「社会的関係の中でやりとりされる支援のこと」と定義し、情緒的サポート（共感や愛情の提供）、道具的サポート（形のある物やサービスの提供）、情報的サポート（問題の解決に必要なアドバイスや情報の提供）、評価的サポート（肯定的な評価の提供）の４つに分類している[7]。一方で、大学新入生を対象にソーシャルサポートを検討した和田（1992）は、①情緒的サポート（信頼、共感、愛などが与えられること）、②所属的サポート（レジャーや余暇活動に他者と一緒に時間を費やすこと）、③情報的サポート（問題になっていることを理解してくれたり、アドバイスを与えてくれること）、④評価的サポート（自分が尊重され、受容されているという情報をもたらしてくれること）、⑤道具的サポート（仕事を手伝ってくれたり、金銭的・物質的援助をしてくれたり、必要なサービスを提供してくれること）の５つに分類している。本研究は、生田（1987）の初学者が伝統技能伝承の領域に入門する際の「世界への潜入」を想定し分析を行うため、和田（1992）の定義を分析枠組みに援用した[8]。

3-2-2　分析方法

本研究においては、Udo Kuckartz（2012）の質的データ分析法を参照し、MAXQDA 分析ソフトを用いて次の手順で分析を行った。①分析枠組みに採用した和田（1992）のソーシャルサポートの分類を参照し【メイン・カテゴリー】を作成した。②メイン・カテゴリーを用いて全てのデータを演繹的に〔コーディング〕した。③コーディングした全データから帰納的に《サブ・カテゴリー》を作成した。本研究では、リサーチ・クエスチョンに適した分析枠組みを援用して分析を行うため、この分析方法を採用した。

3-3　研究における倫理的配慮

本調査は、「日本女子大学 人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て、実施した（課題番号第 417 号）。インタビュー調査は、調査協力者に事前に連絡をして研究の依頼書、説明書、インタビューガイドを郵送し、研究の趣旨を説明し了解を頂いた上で実施した。実施の際は、研究実施に関する説明文書を丁寧に読み交わし、同意書に署名・押印を頂いた。

4　分析結果

4-1　調査協力者の属性

研究協力者の属性は表１に示すとおりである。研究協力者７名で、伝統技能伝承の育成者であり置屋経営に関与している者は６名である。伝統技能伝承の専門職で X 伝統芸能組合の日舞指導者並び舞台演出担当の者が１名である。全員が伝統技能伝承の育成者の資格を有している。

表 1.　調査協力者の属性

年代	性別	継承者の育成に関する主な資格	職種	芸歴	入門時の年代	育成歴
50 代	女性	組合資格日舞 A ランク	置屋経営者	30〜34	10 代後半	25〜30
50 代	女性	長唄名取・囃子名取	置屋リーダー	30〜34	20 代後半	15〜20
50 代	女性	組合資格日舞 A ランク	置屋経営者	30〜34	20 代前半	15〜20
50 代	女性	組合資格日舞 A ランク	置屋経営者	30〜34	20 代前半	15〜20
50 代	女性	日舞名取	置屋経営者	35〜40	10 代後半	10〜15
30 代	女性	日舞名取	置屋リーダー	15〜20	10 代後半	1〜5
50 代	男性	日舞名取・師範	舞踊家・脚本家	40〜45	10 代後半	35〜40

4-2　ソーシャルサポートの分類

【メイン・カテゴリー】には、和田（1992）の分類で示された①情緒的サポート、②所属的サポート、③情報的サポート、④評価的サポート、⑤道具的サポートといった 5 つのソーシャルサポート以外に、伝統技能や価値の継承を媒介に下の世代と上の世代が相互の育ち合う⑥生成継承的サポートが見出された[9]。さらに、【メイン・カテゴリー】である各ソーシャルサポートの具体的な関わりとして、70 の《コード》が抽出され、伝統技能についての関わり、メンターとしての関わり、疑似家族的な関わりに分類された。それらの《コード》から 23 の〔サブ・カテゴリー〕が抽出された。

4-3　分析結果

①情緒的サポート

表 2.　①情緒的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
①情緒的サポート	疑似家族的な愛着と安らぎの提供	疑似家族：不安・不満の受けとめによる置屋内の緊張の緩和
		疑似家族：着付け等の支度を媒介した愛着的な関わり
		疑似家族：入門当初の生活不安の改善
		疑似家族：入門当初の精神不安のケア
	日々の稽古で向き合う伝承者の姿勢	伝統技能：継承者の特性に配慮した稽古
		伝統技能：芸の上達で見えるストレングス
		伝統技能：育成者自身の自己研鑽
		伝統技能：週 3 日ペースで育成者と継承者が向き合う数 10 分
	挫折や傷つき体験から 1 歩を踏み出す後押し	疑似家族：不安を吐き出せる環境づくり
		伝統技能：失敗や傷つき体験の見守りと寄り添い
		伝統技能：不安や恐れを乗り越えて得た「成功体験」の可視化

六

育成者は不安の強い継承者に対し置屋で疑似家族的に関わり、《入門当初の精神不安のケア》《入門当初の生活不安の改善》で安心感を与え、《着付け等の支度を媒介した愛着的な関わり》で愛着的な絆を形成すると共に、《不満・不安を受けとめによる置屋内の緊張の緩和》を行い、〔疑似家族的な愛着と安らぎの提供〕を行っていた。また、育成者の〔日々の稽古で向き合う伝承者の姿勢〕では、育成者は《育成者自身の自己研鑽》を土台に、《継承者の特性に配慮した稽古》を《週 3 日ペースで育成者と継承者が向き合う数 10 分》を積み重ね、《芸の上達で見えるストレングス》を継承者から引き出していた。

さらに、育成者は疑似家族的な関わりで《不安を吐き出せる環境づくり》を行い、継承者の不調を改善し、伝統技能の関わりにおいては《失敗や傷つき体験の見守りと寄り添い》に十分な時間をかけ、継承者が自分の過去を振り返り《不安や恐れを乗り越えて得た「成功体験」の可視化》ができるよう働きかける、〔挫折や傷つき体験から１歩踏み出す後押し〕を行っていた。

②所属的サポート

表 3. ②所属的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
②所属的サポート	置屋を離れた元継承者を緩衝材にした疑似家族関係	疑似家族：元疑似姉妹のアドボカシーから構築される疑似親子関係
		疑似家族：元疑似姉妹がとりもつ継承者の疑似姉妹関係
	頑張ったご褒美としての食事会と家族との余暇の共有	疑似家族：スモールステップ達成のお祝いの個別食事会
		疑似家族：継承者の家族と共に楽しむ小旅行
	1 人で不安を抱えてフラストレーションをためないためのラインの活用	疑似家族：全体と個別を組み合わせた公平なラインサポート
		疑似家族：閑散期の不安を希望に替える個別ラインサポート

置屋を経営する育成者は、仕事外での疑似家族的な関わりを特に大切にしていた。置屋を離れた元継承者の率直な意見を傾聴し、《元疑似姉妹のアドボカシーから構築される疑似親子関係》や《元疑似姉妹がとりもつ継承者間の疑似姉妹関係》のサブ的な疑似家族関係を形成し、〔置屋を離れた元継承者を緩衝役にした疑似家族関係〕をゆるやかに構築していた。また、継承者の一人ひとりの努力に対し《スモールステップ達成のお祝いの個別食事会》や家族ぐるみで日頃の労を分かち親睦を深める《継承者の家族と共に楽しむ小旅行》といった〔頑張ったご褒美としての食事会と家族との余暇の共有〕が見出された。また、仕事がない空白の時間が続いた際は、〔1 人で不安を抱えてフラストレ―ションをためないためのラインの活用〕として、《全体と個別を組み合わせた公平なラインサポート》や《閑散期の不安を希望に替える個別ラインサポート》を実践していた。

③情報的サポート

表 4. ③情報的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
③情報的サポート	実直な稽古の積み重ねが未来を拓く可能性の示唆	伝統技能：継承者としての下積みから独立までの道のり
		メンター：過去の課題の整理と今後の選択肢の示唆
		メンター：伝統芸能の稽古や他の学びを生活に活かすことの示唆
	本人は気づいていない「成功体験」の掘り起こし	伝統技能：稽古の積み重ねによるエンパワメント
		伝統技能：失敗経験による思い込みからの脱却
	助言を受け入れられるタイミングとその効果	メンター：率直な助言に対する反発と後の効果
		メンター：受けとめる側の状況が整った上での助言の効果
	生活再建のための情報提供	メンター：悩みに関する経験者・助言者が居ないための情報不足
		メンター：生活スキルとしての社会資源等の知識の提供
		メンター：パートナー（恋人・夫）に依存しない生活設計
	「個人稽古→見番での稽古→仕事→収入→生活の安定」の「成功体験」の示唆	メンター：生活基盤の整備を優先した稽古の位置づけ
		メンター：収入を得て生活を安定させる先行投資としての稽古
		メンター：芸の世界の厳しい規律とそれに伴うメリット

育成者は、伝統技能の習得の厳しさに伴う生きる糧を得るメリットを伝えるため、多様な角度から助言を行っていた。〔実直な稽古の積み重ねが未来を拓く可能性の示唆〕では、伝統技能の《継承者としての下積みから独立までの道のり》について語り、伝統技能伝承以外の生活や今後の生き方のメンター

として、《過去の課題の整理と今後の選択肢の示唆》《伝統芸能の稽古や他の学びを生活に活かすことの示唆》を提示していた。また、継承者が過去の失敗経験を引きずり、負の思い込みから新しい経験を躊躇うことを踏まえ、伝統技能での《稽古の積み重ねによるエンパワメント》で《失敗経験による思い込みからの脱却》を図り、〔本人は気づいていない「成功体験」の掘り起こし〕を行っていた。一方で、メンターとして情報や助言を提供する際の、《率直な助言に対する反発と後の効果》や《受けとめる側の状況が整った上での助言の効果》といった〔助言を受け入れられるタイミングとその効果〕についての考慮が示された。さらに、メンターとしての関わりでは、生活のしづらさに悩む継承者は、《悩みに関する経験者・助言者が居ないための情報不足》の状態にあり、《生活スキルとしての社会資源の知識の提供》や《パートナー（恋人・夫）に依存しない生活設計の示唆》によって新しい生き方が可能になるよう、〔生活再建のための情報提供〕を行っていた。特に、初学者・入門者に対しては、メンターとして、《生活基盤の整備を優先した稽古の位置づけ》と《収入を得て生活を安定させる先行投資としての稽古》であることを伝え、《芸の世界の厳しい規律とそれに伴うメリット》を説明する等で、〔「個人稽古→見番での稽古→仕事→収入→生活の安定」の「成功体験」の示唆〕を行っていた。

④評価的サポート

表 5. ④評価的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
④評価的サポート	叱る（問題解決に向かう）というマイナス評価の効果	伝統技能：叱る側として育成者に必要な自己統制
		伝統技能：欠点の評価による修正と成長
		メンター：節度をもった関わり方で育てる社会性
	疑似家族関係におけるリーダー役の育成	疑似家族：育てくれた人への感謝
		メンター：リーダー役の労への感謝
	褒めて育てる日々のエンパワメントで導く小さな「成功体験」	伝統技能：稽古でのプラス評価による技能の改善
		伝統技能：人前での失敗を克服するための個人稽古によるフォロー
		伝統技能：努力を認めて人前で恥をかかせない配慮（着付け等も含む）
	日々の稽古が舞台につながり社会化される「成功体験」	伝統技能：芸の上達で得られる伝統技能の継承者としての付与
		伝統技能：稽古の成果としての舞台に立ち経験する浄化と自信
	褒めて育てることで芸の上達と生活再建がパラレルに進む「成功体験」	伝統技能：稽古で実感できる自己成長と達成感
		伝統技能：稽古の成果として舞台で得られる承認
		メンター：本人も気がつかない些細な点を捉える力
		メンター：自己内成長に目を向ける視点

育成者は、継承者との技能伝承の場面、仕事の場面、生活の場面等で、プラスの評価だけでなく、必要に応じてマイナスの評価を与え、継承者の成長を支えていた。具体的には、〔叱る（問題解決に向かう）というマイナス評価の効果〕として、伝統技能においては《叱る側として育成者に必要な自己統制》を前提に、受け手となる継承者は《欠点の評価による修正と成長》がある。また、置屋内で互いの関係が近づく半面、《節度をもった関わり方で育てる社会性》を担うメンターとしての関わりが必要とされた。プラスの評価では、生育過程での《育てくれた人への感謝》や《リーダー役の労への感謝》といった評価によって、〔疑似家族関係におけるリーダー役の育成〕が成されていた。また、伝統技能に関しては、《稽古でのプラス評価による技能の改善》《人前での失敗を克服するための個人稽古によるフォロー》《努力を認めて人前で恥をかかせない配慮（着付け等も含む）》という自尊心を傷つけない配慮が〔褒めて育てる日々のエンパワメントで導く小さな「成功体験」〕となり、《芸の上達で得られる伝統技能の継承者としての付与》《稽古の成果としての舞台に立ち経験する浄化と自信》といった〔日々

の稽古が舞台につながり社会化される「成功体験」〕で他者に承認されるプロセスが示された。さらに、伝統技能における成功体験を、生活全般に波及させる評価的サポートがある。《稽古で実感できる自己成長と達成感》《稽古の成果として舞台で得られる承認》といった伝統技能に関する評価だけでなく、育成者は継承者の仕事や生活場面においても《本人も気がつかない些細な点を捉える力》と《自己内成長に目を向ける視点》をもつことで、継承者を〔褒めて育てることで芸の上達と生活再建がパラレルに進む「成功体験」〕に導いていた。

⑤道具的サポート

表 6. ⑤道具的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
⑤道具的サポート	稽古・仕事・生活・子育て・将来を連動させた取り組み	疑似家族：子育てや学びが尊重されニーズに応える環境整備
		疑似家族：家族関係及び生活問題への介入的な関与
		メンター：継承者が安心して稽古ができる仕組み
		メンター：稽古が子育てを含む生活の安定へ円環的に向かう仕組み
	安心して稽古を続けるための生活基盤の形成	伝統技能：髪結い・着付け等の習得支援
		疑似家族：託児所での子育て支援
		疑似家族：衣食住を始めとする個々の生活ニーズへの支援
		疑似家族：継承者の背後にある家族の生活支援
		メンター：置屋生活が長い継承者への独立支援
	「成功体験」を組み入れた個別稽古と講習（全体稽古）での取り組み	伝統技能：稽古での努力が実質的な収入で報われるシステム
		伝統技能：個人稽古の小さな「成功体験」で培われる自信
		伝統技能：個人稽古の経験を土台にした講習（全体稽古）並び座敷・舞台（仕事）での「成功体験」
	地域社会の理解を得るための取り組み	伝統技能：稽古が優先できる地域社会の理解
		伝統技能：地元産業として地域社会の関係者の理解と連携
		疑似家族：芸事を仕事にする者の子育てに対する理解

必要な支援を提供するサポートとして、育成者は、《子育てや学びが尊重されニーズに応える環境整備》《家族関係及び生活問題への介入的な関与》といった疑似家族的な関わりや、メンターとして《継承者が安心して稽古ができる仕組み》《稽古が子育てを含む生活の安定へ円環的に向かう仕組み》をつくることで、継承者の生活全般を捉えた〔稽古・仕事・生活・子育て・将来を連動させた取り組み〕を行っていた。具体的には、〔安心して稽古を続けるための生活基盤の形成〕のため、伝統技能では《髪結い・着付け等の習得支援》、疑似家族的な関わりでは《衣食住を始めとする個々の生活ニーズへの支援》《託児所での子育て支援》《継承者の背後にある家族の生活支援》を行い、メンターとして《置屋生活が長い継承者への独立支援》がなされていた。生活を支える糧となる伝統技能の関わりでは、《稽古での努力が実質的な収入で報われるシステム》において、継承者の《個人稽古の小さな「成功体験」で培われる自信》が積み重なり、やがて《個人稽古の経験を土台にした講習（全体稽古）並び座敷・舞台（仕事）での「成功体験」》につながる、一連の〔「成功体験」を組み入れた個別稽古と講習（全体稽古）での取り組み〕が見出された。さらに、地域社会で暮らす生活者として、継承者に必要な支援として、伝統技能については《稽古が優先できる地域社会の理解》《地元産業として地域社会の関係者の理解と連携》、疑似家族的な関わりでは《芸事を仕事にする者の子育てに対する理解》といった〔地域社会の理解を得るための取り組み〕の必要性が示された。

⑥生成継承的サポート

表 7. ⑥生成継承的的サポート

【メイン・カテゴリー】	〔サブ・カテゴリー〕	《コード》
⑥生成継承的サポート	育成者が試みる疑似姉妹的なチームワーク	疑似家族：育成者の公平な態度で形成される信頼関係
		疑似家族：疑似姉妹の姉役を担う人材育成
		疑似家族：姉役が妹役へ伝える生きる術としての生活スキル及びマナー
		疑似家族：疑似姉妹の姉役への慰労とケア
	置屋の経験を活かした人生の再構築	疑似家族：芸と子育ての両立による生活の再構築
		疑似家族：置屋を基軸にしたアコーディオン・ファミリー
		メンター：置屋の経験を糧にしたライフコースの形成
	技能伝承を通じて親世代・子世代が共に育つ生成継承性	伝統技能：育成者と継承者の互いの努力が成就し舞台で味わう達成感
		伝統技能：育成者から受けた教えを次の世代に還す貢献性
		伝統技能：下の世代の声を聞くことで可能になる継承性
		メンター：育成者自身に必要な自己統制能力と自己肯定感

本研究では、和田（1992）のソーシャルサポートの分類では整理しきれないサポートも見出された。伝統技能を媒介に、世代を超えて柔軟な対応や軌道修正を行いながら経験を伝え合い、相互に成長する生成継承性的なサポートである。まず、疑似家族的な関わりで〔育成者が試みる疑似姉妹的なチームワーク〕では、《育成者の公平な態度で形成される信頼関係》の形成を土台に、《疑似姉妹の姉役を担う人材育成》を兼ねて《姉役が妹役へ伝える生きる術としての生活スキル及びマナー》が伝承されており、育成者は《疑似姉妹の姉役への慰労とケア》によって、次世代の育成者を育てていた。一方で、メンターとして、継承者が《置屋の経験を糧にしたライフコースの形成》ができるよう支援し、疑似家族的に《芸と子育ての両立による生活の再構築》をサポートすると共に、置屋を離れた継承者が再び戻ってきた際は門戸を開く《置屋を基軸にしたアコーディオン・ファミリー》を形成する等、〔置屋の経験を活かした人生の再構築〕に向けたソーシャルサポートが見出された。技能伝承、メンター、疑似家族的な関わりのいずれにおいても、《育成者自身に必要な自己統制能力と自己肯定感》を土台に、《育成者と継承者の互いの努力が成就し舞台で味わう達成感》《育成者から受けた教えを次の世代に還す貢献性》《下の世代の声を聞くことで可能になる継承性》といった世代を超えて〔技能伝承を通じて親世代・子世代が共に育つ生成継承性〕が、技能伝承を可能にしていた。

5　考察

本研究は、保護者が子育てに困難を抱えた際にすみやかに相談につながり、援助要請を行う基盤を創る際に必要な、保護者の自己肯定感を育む関わりをソーシャルサポートの観点から検討するために、伝統技能伝承の育成者と継承者が伝統技能を媒介に信頼関係を構築する疑似家族的な関係において、育成者のソーシャルサポートが継承者の「成功体験」を促し自己肯定感を高める関わり方を検討した。

宮川・浅沼（2015）が示したように、子ども時代に自分を認めてくれる他者との関係性のなかで育ち、課題とするテーマを媒介に試行錯誤でやり遂げた経験が成功体験になると同じく、伝統技能伝承の領域においても、置屋経営者である育成者を中心に、伝統技能を媒介にした稽古によって継承者が育成者に見守られ成長を承認される成功体験が見出された。また、長瀬（2018）が示した、乳幼児が周囲の大人に見守られる環境で、小さな成功体験の積み重ねを褒められることで育まれた自己肯定感が、将来

の困難を乗り越える土台になるように、伝統技能伝承においては、まず、〔疑似家族的な愛着と安らぎの提供〕によって他者に見守られて過ごす安全な環境を整備し、稽古を通じて《不安や恐れを乗り越えて得た「成功体験」が可視化》できるよう働きかけ、〔挫折や傷つき体験から1歩踏み出す後押し〕といった情緒的サポートを行っていた。

また、保育者が子育ての知識や技術を介し母親と関わり信頼関係を構築し、母親が生活のなかで実践していることを言葉にして認めて母親が自信をもって子育てができるように（榊原 2017）、伝統技能伝承の育成者は伝統技能を媒介に、技能伝承という道具的サポートを提供しながら、評価的サポートによって、〔褒めて育てる日々のエンパワメントで導く小さな「成功体験」〕を基盤に、継承者の自己肯定感を育てていた。榊原（2017）は、保育者からの承認によって自信がついた母親の次の段階として、子育ての仲間と十分につながりがもてるよう他者との関係性を広げる成功体験を促している。伝統技能伝承においても、個人稽古で育成者に褒められ、芸の上達を実感できた継承者が、次の段階の〔日々の稽古が舞台につながり社会化される「成功体験」〕につながっていた。この段階では、育成者は《人前での失敗を克服するための個人稽古によるフォロー》《努力を認めて人前で恥をかかせない配慮（着付け等も含む）》という自尊心を傷つけない配慮を、評価的サポートによって行っていた。また、技能伝承の育成者は、情報的サポートによって、《過去の課題の整理と今後の選択肢の示唆》から、《失敗経験による思い込みからの脱却》を図り、〔本人は気づいていない「成功体験」の掘り起こし〕を行い、継承者のドミナント・ストーリーをオルタナティブ・ストーリーに書き換え、自己肯定感を高めていた。

伝統技能伝承における先行研究では、既に育成者と継承者の信頼関係を軸に、ソーシャルサポートの輪が重なる環境で、生活基盤の調整も図るといった踏み込んだ支援を受けながら、日々の稽古で小さな成功体験を重ね、自己肯定感を高める状況が検討されている（西岡 2022）。本研究で見出された、継承者が子育てをしながら学ぶことにも価値を置いた《子育てや学びが尊重され継承者のニーズに応える環境整備》といった道具的サポートや、《生活スキルとしての社会資源の知識の提供》の情報的サポートは、母子生活支援施設の支援でもその重要性が示されたように、生活基盤を整えるための法的支援・社会的な制度利用の支援、母親の学びの保障による自立に向けた就労支援、子育てに係る支援として、女性たちが仕事と子育てを両立し自律的に生活するための必須の支援であるといえる。一方で、〔置屋を離れた元継承者を緩衝役にした疑似家族的関係〕の構築や、〔頑張ったご褒美としての食事会と家族との余暇の共有〕〔1人で不安を抱えてフラストレーションをためないためのラインの活用〕といった、関係者が安定してつながるための所属的サポートについては検討されていない。また、《芸事を仕事にする者の子育てに対する理解》を始めとする〔地域社会の理解を得るための取り組み〕といったメゾレベルでの道具的サポートについても、先行研究では見出されておらず、これらは子育て支援の領域に重要な示唆を提供する。さらに、《育成者と継承者の互いの努力が成就し舞台で味わう達成感》《下の世代の声を聞くことで可能になる継承性》や、《置屋を基軸にしたアコーディオン・ファミリー》を形成する生成継承的サポートは、指導的な関わりに傾倒しがちな支援者と保護者及び母親との関係性を見直し、子育ての社会化に向けて地域社会が子育てをする親たちの「実家」的な役割を果たす支援モデルの検討に、新たな視点を提供する。

厚生労働省はソーシャルサポートを、「社会的関係の中でやりとりされる支援。健康行動の維持やス

トレッサーの影響を緩和する働きがある。」とし、情緒的サポート（共感や愛情の提供）、道具的サポート（形のある物やサービスの提供）、情報的サポート（問題の解決に必要なアドバイスや情報の提供）、評価的サポート（肯定的な評価の提供）をあげている[7]。しかし、地域社会で暮らすひとり親家庭で、多くの生活問題を抱え負い目や自信のなさから相談することに対して不安をもち、「相談に行く気がしなかった（清水 2016）」状況にある保護者や母親に対しては、地域社会とつながるための所属的サポートや、子育てをする者の声を聞くことで次世代の生命を継いでいく生成継承的サポートも、視野に入れることが必要だろう。

6　まとめ

本研究では、伝統技能伝承におけるソーシャルサポートから示唆を得て、子育てをする保護者が相談につながるための、自己肯定感を育てる「成功体験」について検討した。過去の失敗体験や傷つき体験からの回復が未然で、新しい経験を躊躇い関係を閉ざしてしまう保護者に対しては、伝統技能伝承に対応する子育て生活スキルを媒介にした関わりによって、保護者が支援者に見守られる情緒的サポートを提供しながら、子育てで実践した取り組みについて評価的なサポートを行い、支援者から成長を承認される小さな「成功体験」を積み重ねていくことが自己肯定感を育むだろう。その際には、疑似家族的な愛着と安らぎが提供される状況の設定や、「成功体験」が可視化できる仕掛けも必要になる。支援者との関わりで自己を回復した保護者の次の段階は、地域社会で特に同じく子育てをする保護者を始めとする他者との関係性を築く「成功体験」を積み重ねることにある。人前で自尊心を傷つけられるような経験をフォローしながら、再び社会関係を構築するための１歩を踏み出すための情緒的サポートが必要になる。さらに、地域社会とのつながりが保たれる所属的サポ―トや、支援者を始めとする地域社会の人々との関係性を構築する際の生成継承的サポートも、子育て支援策に組み込むことが必要だろう。

本稿の限界として、調査対象を伝統技能伝承の場での継承者育成に限定し分析したことがあげられる。今後の課題として、子育て支援の現場で実践されている支援者の取り組みとも対比させながら、共通点や相違点を見出し、実際の支援に有効な方法を検討していきたい。

【謝辞】本調査にご協力頂いたＸ伝統芸能組合の育成者の皆さまに、心から御礼申し上げます。
【付記】本調査は、科学研究費助成事業若手研究 19K13987 の助成を受けております。

注

1　内閣府「平成 16 年版　少子化社会白書（全体版）第１部少子社会の到来とその影響」
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w- 2004/html_h/html/g1110010.html
（2022.8.1 閲覧）

2　令和２年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数
https://www.mhlw.go.jp/content/000863297.pdf　（2022.8.1 閲覧）

3　脇本（2008）は、自尊感情の高低と不安定性の影響が、非援助志向性という認知的側面だけでなく、日常的

な援助要請にも影響を及ぼすとしている。

4　西岡（2017）は、心中による虐待死の防止に向けて、原家族で自我を損傷した母親の自尊感情と自己肯定感を回復するための支援として、母親の「成功体験」に着目した。

5　日本サーバント・リーダーシップ協会 HP、樫原（2019）を元に、サーバント・リーダーシップの 10 の特性は、サーバントハート（傾聴・共感・癒し・気づき・納得・執事役）、成長支援（人々の成長に関わる、コミュニティづくり）、ビジョナリー（概念化、発見力）に整理される。

6　本稿では西岡（2022）を参照し、子育て生活スキルを、「子育て生活に必要な家事・養育・対人関係・社会資源の活用等に必要なスキル」と定義する。

7　厚生労働省
https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/exercise/ys-067.html　（2022.8.1 閲覧）

8　西岡（2021）は、伝統技能伝承の関連文献を検討し、生田（1987）の「世界への潜入」から、弟子である継承者は伝統技能伝承の世界に入門することで、伝承されるわざ（伝統技能）を媒介に、師匠である伝承者と生活の場を共にし、伝承者の動作を模倣しながら、継承者独自の目標に応じて得られる内在的な成功感によって、自らが大きな目標を設定し探究を深めることを見出した。本研究の研究対象の状況が大学新入生の立場に近い状況にあると判断し、和田（1992）のソーシャルサポートの分類を採用した。

9　generativity（生成継承性）とは Erikson（1950）の造語で、次世代を導き確立することへの関心をさし、中年期の心理社会的発達課題でもある。本稿では Erikson（1950）の定義に倣い、子孫に限らず事物、技術、価値といったあらゆるものを、世代を超えて受け継ぎ、新しく生成しながら次の世代に継いでいくソーシャルサポートを、「生成継承的サポート」とした。

引用・参考文献

Erikson, E. H. 1950. Childhood and Society. New York: W. W. Norton & Company.

本田真大 2017「援助要請と被援助志向性の心理学」『親の援助要請』水野治久編　金子書房 38-46

生田久美子 1987『「わざ」から知る』東京大学出版会

岩﨑順子・中野綾美・野嶋佐由美 2021「Family Confidence の概念および関連要因に関する文献研究」『高知女子大学看護学会誌』46（2）13-23

樫原理恵 2019「サーバント・リーダーシップとは看護組織における展開の可能性を考える」『看護管理 6』502-510

笠原正洋 2000「保育者による育児支援 : 子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から」『中村学園研究紀要』（32）51-58

厚生労働省 2011「資料 1-6（2）大塩委員提供資料　母子生活支援施設における支援事例　事例を通じて社会的養護における母子生活支援施設の機能を考える」『第 1 回児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会資料』
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000011cpd-att/2r98520000011cqu.pdf　（2022.8.1 閲覧）

宮川理奈子・浅沼茂 2015「自己肯定感を育む現代教師の特質 : 7 人の優秀教師の語りの分析から」『東京学芸大学紀要』66（1）13-26

諸富祥彦 2011『ほんものの「自己肯定感」を育てる道徳授業』明治図書出版

長瀬啓子 2018「[研究ノート] 保育内容五領域と育みたい資質・能力について―セルフ・エフィカシーとの関連性から―」『東海学院大学紀要』12 133-142

中澤香織 2020「内面化したジェンダー規範と戸惑い、葛藤－母子生活支援の最前線に立つ援助者の語りから」『ジェンダーからソーシャルワークを問う』ヘウレーカ

日本サーバント・リーダーシップ協会 HP　https://www.servantleader.jp/about　（2022.8.1 閲覧）

西尾久美子 2017「伝統文化専門職の人材育成 : 芸舞妓と能楽師の事例」『京都女子大学大学院現代社会研究科紀

要』1 11-20
http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/2474/1/0140_011_001.pdf （2022.8.1 閲覧）
西尾久美子 2006「伝統文化産業におけるキャリア形成と制度：京都花街の芸舞妓の事例」
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/thesis/d1/D1003638.pdf （2022.8.1 閲覧）
西岡弥生 2022「子育ての社会化に向けた「子育て生活スキル」伝承型支援における支援者の役割の検討：伝統技能伝承の取り組みから見出されたサーバント・リーダーシップ的な関わりに焦点をあてて」『洗足論叢』50 159-174
西岡弥生 2021「伝統技能伝承のあり方にみる児童虐待防止対策におけるオルタナティヴな視点: 関連文献及びフィールドワークの検討から」『洗足論叢』49 65-80
西岡弥生 2017『「心中による虐待死」の子ども家庭福祉研究－ファミリーソーシャルワークの必要性－』聖隷クリストファー大学大学院社会福祉学研究科博士論文
榊原久子 2017「〈 研究ノート〉一時保育の担い手に必要な専門性に関する一考察」『川口短大紀要』31 151-159
清水冬樹 2016「「相談」とつながらない母子家庭の母親たちへの支援の視点―自治体調査における 2 次分析を通じて―」『福祉社会開発研究 = Annual report of researches on development of welfare society』（8）85-93
菅沼敬介・野田敦敬 2018「主体的に学びに向かうことで「自己肯定感を高める生活科学習」に関する研究」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 The journal of the Teaching Career Center』（3）115-122
高橋智恵・齋藤泰子 2018「0～4 か月児の母親の日常生活における育児に対するレジリエンスに影響を及ぼす育児体験」『武蔵野大学看護学研究所紀要 = The annual bulletin of Musashino University, Institute of Nursing』（12）41-48
高畑芳美 2014「子育ての「主体」である母親を支援する幼稚園の役割―園内の「子育て相談」に対する保護者インタビューの考察から―」『保育学研究』52（3）355-364
谷口泰史 2003『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践　子ども家庭福祉の臨床から』ミネルヴァ書房
鶴宏史・中谷奈津子・関川芳孝 2017「保育所を利用する保護者が保育士に悩みを相談する条件 - 保護者へのインタビューを通して」『教育学研究論集』12 31-38.
Udo Kuckartz. 2012. Qualitative Text Analysis. SAGE.（＝佐藤郁哉 2018『質的テキスト分析法』新曜社）
上原諒子・中西伸子 2017「産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連」『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』13 48-56
和田実 1992「大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響」『教育心理学研究』40（4）386-393.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/40/4/40_386/_pdf/-char/ja （2022.8.1 閲覧）
脇本竜太郎 2008「自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響」『実験社会心理学研究』47（2）160-168
厨子健一・佐川早季子 2019「保育者によるソーシャルサポートが在園児母親の援助要請に与える影響」『国際幼児教育研究』26 23-38